

① 電 気
② 外 れ
③ 生 活

④ 広 大
⑤ 音 色

〔「宏大」も可〕

② ア
オ
イ

② 花
③ ど
く
ウ

I 2
II 1
III 2

③
① ア
③ エ

② イ
③ ウ

④ およめさん

⑤ A い う
B ど な
C お へ そ

⑥ ま っ す ぐ

配 点

① 各2点×5=10点

②~③ 各5点×18=90点

<計>100点

1 小学校2年生までに学習した漢字から出題している。①の「電」を「雷」にしないこと。「あめかんむり」の中の「てん」の向きにも気をつけよう。②の「外」は「そと・ほか・ガイ・(ゲ)」とも読む。③の「活」を使ったほかのことは(活気・活動など)も覚えよう。「生」は「いきる・うまれる・はえる・なま・シヨウ・(おう)・(き)」とも読む。④「宏大」は広くて大きいこと。⑤「音色」は音の感じのこと。

2

1 インドネシアという国にある「ジャカルタ」という街から船で長崎に来たオランダ人が持ってきたおいしいものである。その「ジャカルタ」をだれかがどこかで「ジャガタラ」と聞きまちがえたので「ジャガタライも」と呼ばれ、いつのまにか「じやがいも」になった。

2 A アンデスで生まれたじゃがいもを十六世紀にスペインの船乗りがヨーロッパに伝えた ↓ でも ↓ いも類を食べる習慣がなかったのと、新芽や緑色になった皮にどくがあるせいで、食べなかった。

B 北ヨーロッパでは麦が不作で食糧不足になっていた ↓ そこで ↓ 寒いところでも育つじゃがいもを食糧として育てはじめた。

3 ② 「花を楽しむだけで、食糧としては普及しなかった」に続けて「王妃マリー・アントワネットも」とあるので、「愛した」のは「いも」ではなく「花」ということになる。

③ 国王はじゃがいもが何ではないことを証明したのかを考えることは、それまでじゃがいもが何だと思われていたのかと考えることと同じである。それではないことを証明してみせたら「国民にじゃがいもの栽培をうながした」ことになるのだから、それはよくないものである。じゃがいもが「食糧としては普及しなかった」原因のひとつであった。

4 食糧不足だから麦のかわりにじゃがいもを育てたのであった。ところが、どくがあると思われていたのでみんなが食べようとしていない。そこで「国王のフリードリッヒ大王は、家臣の前で毎日じゃがいもを食べ」て、どくがないことを証明したのである。アは「栽培をうながした」あとのことである。イは「栽培をうながした」方法であって、理由ではない。エの「スペインの船乗り」はこの部分とは関係がない。

5 I じゃがいもは「トマトと同じアンデスで生まれた」とあった。

II プロイセンの国王フリードリッヒ大王が、家臣の前で毎日食べて、栽培をうながしたおかげであった。

III フランスの王妃マリー・アントワネットは「花を楽しむ」だけで、食べてはいなかった。

3

1 ① 「うかないかお」は心配ごとなどがあって晴れやかでないかおのこと。

③ 「いまましい」は非常にはらだたく感じること、しゃくにさわること。

2 すぐあとに「シップ船長がいくらかじをまっすぐにもつても、チャチャ号はちよつとずつちよつとずつ、右のほうへいってしまふのです」とあった。ア「しずみそうだ」やエ「底に穴があいた」では「ちよつと」どころではない。ウ「さかだちした」のはシップ船長であってチャチャ号ではない。

3 すぐあとに「とたんにチャチャ号では時間がわからなくなり」とあった。シップ船長が「かべにかかった」「時計」をけとばしたせいで、どこかにいったか、こわれたかしたのである。このとき、あたまから「したへずどんとおち」たせいで、「あたまのてっぺんには、ぶくんとこぶができ」たのであった。

4 シップ船長が「あいにいこう」としている人は何に「なるかもしれない人」だろうか。しかも「こぶつきのあたま」ではあいたくない人である。「おかあさん」では「これから、……になるかもしれない」に合わない。

5 A シップ船長がいった「とばせ、もつととばせいっ」ということばのとおりにしたのであった。

B 「なんと、気のきかないやつだ」とどなられて、「とんちんかん」という悪口をいわれたのであった。

C 「右にまがってしまった」のは「おへそ」である。

6 おへそが右に三センチまがったチャチャ号は「右のほうへいってしまふ」のだが、それは「ちよつとずつ」なので「まっすぐ」「すすんでいるようにみえ」るのである。